

＜名勝小金井桜 復活の光と影＞（上）昭和の風景 もう一度

2021 年 4 月 30 日 07 時 19 分

玉川上水に沿ったヤマザクラ並木「名勝小金井桜」を、かつて関東一と称された姿に復活させようという計画を、10 年前から小金井市域を中心に都と同市などが進めている。上水を管理する都水道局が一部区間で土手に生えた樹木を「皆伐（かいばつ）」したため、環境保護団体は「生物多様性の時代に逆行する」と反対。計画は現在、中断している。推進派と反対派に歩み寄る余地はあるのか。

（この連載は花井勝規、林朋実が担当します）



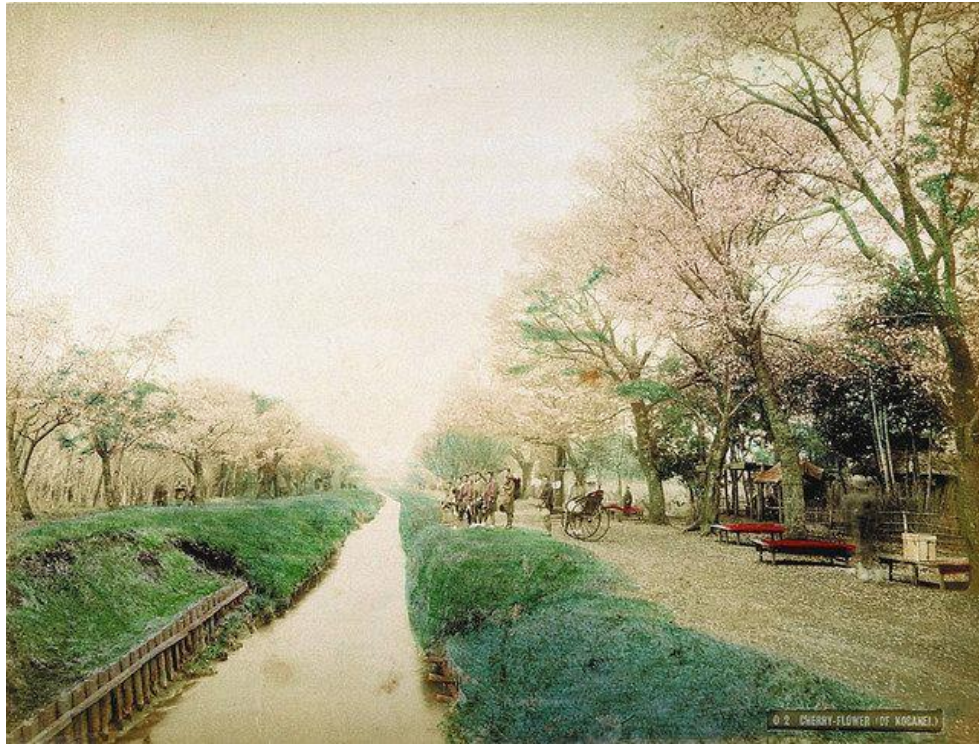
玉川上水堤のサクラ並木はヤマザクラのため、ソメイヨシノより開花が遅い＝小金井市で（3月31日撮影）

「雑木がうっそうと生い茂っていた土手がきれいになり、下草も生えてきた。これが小金井桜と玉川上水の本来の風景です」サクラの保全に取り組む市民団体「名勝小金井桜の会」の小沼広和会長（72）がほほ笑んだ。脳裏に浮かぶのは、上水の土手で家族が花見を楽しんだ昭和 30 年代の風景だ。当時は今あるフェンスがなく、土手へ自由に出入りできたという。

小金井桜のヤマザクラの並木は、江戸時代中期の 1737 年ごろ、幕府の命で小金井橋を中心に上水の両岸に植えたのが始まり。吉野山（奈良県）など各地のヤマザクラを取り寄せた。浮世絵にも描かれ、江戸近郊で 1 番のサクラの名所になった。1924（大正 13）年には、現在の小平市の小川水衛所から、小金井市、西東京市を経て、武蔵野市の境橋までの 6 キロが国の名勝に指定された。

環境が変わったのは 65 年だ。淀橋浄水場（新宿区）が廃止され、上水の水流が止まった。上水管理の停滞で荒廃が進み、雑木が繁茂していった。

これに先立って 54 年には都立小金井公園が開園した。現在 1700 本のサクラを誇る同園が、都内有数のサクラの名所に取って代わった。



明治30年ごろ撮影された「小金井橋の景」。手彩色されている＝小金井市提供

小沼さんは25年ほど前、小金井市職員として小金井桜をテーマにした市民講座を企画したことをきっかけに保全活動に関わるようになった。当初は「負担を嫌がる空気が市内にあった」と振り返る。サクラの保護には手間がかかるからだ。市民から「寝た子を起こすな」と陰口をたたかれたこともあった。

2003年、玉川上水が江戸、東京の発展を支えてきた歴史的価値を有する土木施設・遺構として国の史跡に指定され、追い風が吹いた。史跡整備の一環で小金井桜の再生計画が具体化した。名勝指定当時は約1400本あったヤマザクラは11年には786本まで減少。補植などの努力を続けているが、現在も913本にとどまる。

小金井市の西岡真一郎市長は「小金井桜は280年にわたり継承されてきた貴重な国の財産だ。管理が行き届かず、枯死の危機にあるサクラの保全は私たちの使命だ」と力を込める。



<玉川上水> 江戸初期の1653年、江戸市中に多摩川の水を供給するため建設された導水路。羽村取水口（羽村市）から四谷大木戸（新宿区）までの全長約43キロ。現在も現役の水道施設として稼働する上流部（小平監視所まで）より下流は1965年から送水を停止していたが、86年の清流復活事業で下水の高度処理水を利用した水の流れが復活した。

2021 年 5 月 1 日東京新聞朝刊「多摩武蔵野版」

＜名勝小金井桜 復活の光と影＞（中）「保護名目の自然破壊」

2021 年 5 月 1 日 07 時 20 分



玉川上水堤の雑木が「皆伐」され土手に残った無数の切り株＝3月24日、いずれも小金井市で

「この惨状を見てください。ひどすぎる。サクラ保護の名を借りた自然破壊だ」。小平市などで幅広く活動する市民団体「玉川上水みどりといきもの会議」の高槻成紀代表は、小金井市を流れる玉川上水の関野橋から梶野橋の変わりてた土手の様子を指さし、語気を強めた。

土手の樹木はすべて根元から伐採され、切り株だけを残す「皆伐（かいばつ）」状態になった。高槻さんは「生物多様性の時代に逆行する。サクラを優先して緑を切るのは時代錯誤の懷古趣味だ」と伐採を続ける都水道局や小金井桜復活の旗を振る小金井市を批判する。「ヤマザクラは山に咲く野生品種で他の樹木とともに群落を形成する。サクラを優先するのは良いにしても、その脇にカエデやコブシがあっても問題はないのに…」

都水道局は2009年に史跡玉川上水整備活用計画を策定。翌年度から19年度までの10カ年計画で主に小金井市内の小金井橋から梶野橋までの約2キロで整備を進めてきた。計画では、倒木やのり面の崩壊を招く恐れのある樹木の撤去や名勝小金井桜の保護に主眼を置いている。



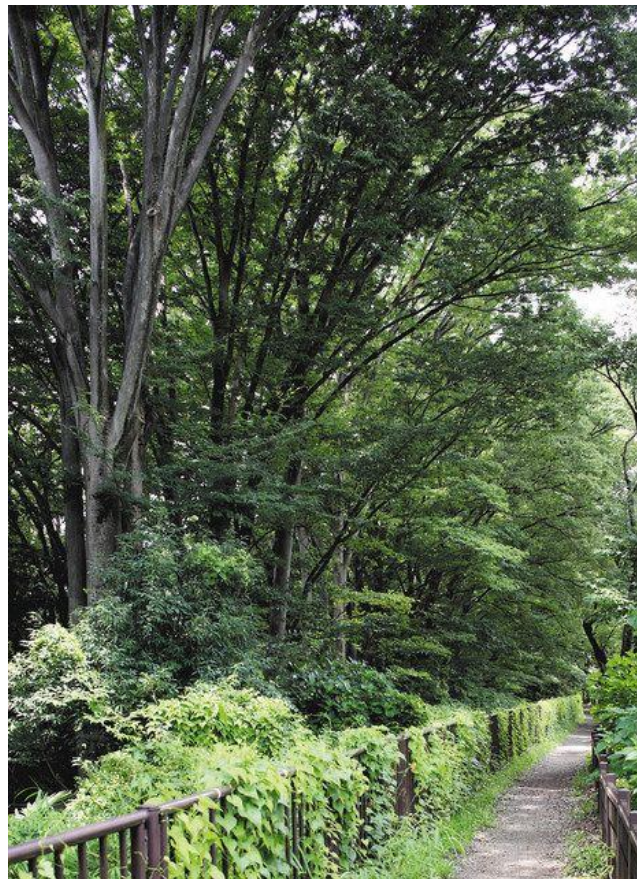
「小金井玉川上水の自然を守る会」（略称・こだま）のメンバーで森林インストラクターの大石征夫さん（75）は「伐採する前に住民が立ち会って『このイロハモミジは残して』と要望リストを提出したのに、結果的にほぼすべて伐採された。地元住民の意向を無視する行政のやり方はおかしい」と憤慨する。

こだまが19年8月、整備区間約2キロの14カ所で地表面の温度を比べたところ、伐採される前の緑が残された場所では一番低い温度が約32度だったのに対し、皆伐エリアの最大値は67度超。その差は最大35.6度もあった。

こだまの元代表で、カメラマンの加藤嘉六さん（73）はそんな玉川上水の「緑陰」の効果を説く。「上水に残された樹木は都市化が進んだ東京では希少なグリーンベルト（緑の回廊）だ。地球温暖化対策の観点からも緑の破壊をこれ以上進めないでほしい」と願う。

こうした批判に対し、日本自然保護協会理事長で、小金井市の「玉川上水・小金井桜整備活用推進委員長」を務める亀山章東京農工大名誉教授は「冷静に考えてほしい」と促す。「ケヤキなど雑木が繁茂した状況を放置すれば玉川上水ののり面の崩壊につながる。上水は江戸が栄えた命の根源で、歴史的に大きな価値がある」と反論する。

小金井桜の保全については「ケヤキは年間2メートル伸びるのにサクラは1メートルに満たない。成長速度が違いすぎる。徹底的にケヤキを伐採しないかぎり、保全はうまくいかない」との立場だ。



伐採以前の玉川上水の様子。ケヤキなどが生い茂り「緑陰」を作っていた

2019年7月（加藤嘉六さん撮影）

2021 年 5 月 2 日東京新聞朝刊「多摩武蔵野版」

＜名勝小金井桜 復活の光と影＞（下）宙に浮く西への延伸

2021 年 5 月 2 日 06 時 42 分



小金井市で造園業を営む杉山利男さんが育てているヤマザクラの苗。

玉川上水堤に移植するまで 6 年かかるいう

名勝小金井桜の復活計画は約 10 年がかりで、小金井市内の小金井橋から梶野橋まで約 2 キロの整備がほぼ完了した。いよいよ次の段階へ進もうとしていた昨年 7 月、小平市が慎重姿勢に転じ、事業は中断したままになっている。

次は、名勝の全長 6 キロのうち小金井橋から西側の茜屋橋までの約 1 キロの区間を 5～6 年で整備する計画。この区間は市境が玉川上水の上にあり、北側は小平、南側は小金井市域のため、玉川上水を管理する都水道局、サクラを管理する都教育庁と両市の四者が事業の進め方を話し合ってきた。

小平市の小林正則前市長は昨年 6 月、玉川上水やサクラの保護について「生物多様性の維持」や「地元への配慮」を求める都知事宛ての要望書を提出した。同市内の複数の環境保護グループが小金井市内の樹木の伐採状況に危機感を抱き、市や都に対する陳情活動を活発化させていたからだ。

環境保護団体などから樹木の伐採で批判の矢面に立ってきた都水道局の担当者は「小金井市域での伐採は地元の意向に沿った」と打ち明ける。小金井橋以西の計画は「小平市の協力がなければ難しい」とあきらめ顔だ。

名勝の指定範囲のうち小平市域は約 3 キロだが「名勝の『小金井』の地名がネックになって小平市は以前から乗り気ではなかった」とも話す。



都水道局は「ジャングル状態の雑木が史跡・玉川上水の維持に脅威になっている」と年約 1 億円の予算を確保し、年に 1000～2000 本の伐採を続ける。沿線住民からは伸びた樹木が生活の支障になるので「切って」という要請の数が「切るな」を大幅に上回っているのが実情だという。

ただ「切っても切っても次から次へと生えてきて追いつかない」と担当者はこぼす。

小平市内の小金井桜は 287 本あり、多くが高齢木だ。復活計画の中断で枯死を心配する声が出ており、小金井市役所の内部には「南側の小金井市域だけでも事業を進めるべきだ」との強行論もくすぶる。

だが、西岡真一郎市長はこれを「考えていない」と否定する。小平、小金井、西東京、武蔵野の名勝エリア 4 市による計画推進を目指す立場から「保全できる樹木は残してほしいという住民の声と上水ののり面やサクラの保護とのバランスを大事にしたい」と打開策を探る姿勢をみせる。

小金井市内のある環境保護団体幹部は「『1 本も木を切るな』というグループと皆伐（かいばつ）を進めた両極の勢力が対立し、政治問題化している印象だ」と指摘。「適度に緑の保全をしながらサクラ保護はできるはずだ。互いに歩み寄り、共存の道を探るべきだ」と語った。



大正時代、旧東京市が名勝指定を記念して小金井橋脇に建てた標柱。

背後にヤブが迫っており、小金井桜の現況を象徴している＝小平市で

(この連載は花井勝規、林朋実が担当しました)